中村俊定文庫
文庫 18
397
1

小序

三州文

夢中又七弦あり〳〵へ口ずさみ給ふ八歌無狂化の
仙法あるべしやとふとおもふるとも我の法を
ひろめ給へ延喜帝十弦世をくめなるべ
き弾ぜる老子もまのひろめる籍七絃と
なずけさせ給ふ長義とかしこ八そを紙トせる
官女の琴とかるとも宮使へ作りき高
第〳〵瓦るやの一節〳〵言つゑ志ふりく手紙の

おく紙さゝ杜撰乃旅情を慰むるにて八月廿五日
芳名書しうらくのなり世外の法こゝ
掲ませてをのつゝ吳の筆跡刻彫し
あるはさ神童手蹟あり珍しく山水を
描ひて八景の沢さ古典の記を載せさ撰や
ありさむさきよりこゝ二月廿四日の夜

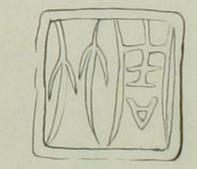
世紙八きゝ面乃降るり
直さ水流れて出づを見へ
あ白さ淮さも三ゝ見直さ水の白さ今の

夢師の於るりと笑て美さあ三ゝさ夜
明の夜さりは八時ものして予こある
いさを師乃ゝ三ゝ原出ゝて東武こ伺ふ
師より文を面あり廿四日の夜

みよし野の
此白髮尺さゝの伝あり朱こ生を沿り
ゝを拾て鶯く鳴呼彩里を傷なゝ
師と同月同夜さかゝる美恵八めつゝと
をかくゝゝやさ師の句佳を

京都帝国大学図書

余、播州ニ至テ小冊ヲ得テ誦シ魚ト水ノ
愛ヲ以テ自ラ名ヅクルモ乃チ冥加ヲ知ラズ人ニ集ノ
序ヲ請フ故ニ力ヲ竭シテ同志ノ士ヲ招ク
世変乃剌石愛水居士識



寛政十二壬午のとし卯月

中村俊定文庫

やとり日記

駿州南

第一 寛政元年

家ニ有シトキ紀行ヲ好ミ桜ヒロ〳〵ト咲ルヲ見
ものゝ哀ヲ思ヒ出ルヨリ〳〵ニ予モ其
詞ヲ学ビ遊居ニシテカヽル事ヲ楽ム
ヲ事ヲ思ヒ出テ下ニ
涙ヲ流シ〳〵友ノ愛ヲ消セ
ル事ヲ乃日夕ヨトカヽルニ

六畳ばかりなる師のもとを訪おとり
ものしし東陽山人今彩を彩まつて尺五寸
巻の月を掛ふ六月三夜師匠の
枕を敷のつまり俳し友誰れ訪ふ
秋雲いと無何なるもむ

後の月十三夜

中秋月と花と二方縁　夢太
牛吹自裏の青を千金　凡子
五十日百夜無打墨之

此句はまつ月見のとてよりひめのとての探敬
あるまつ月のもとにわるを演説しめを楽
まつ月の文字カ　桃子人の友引集
翌て績乃一字を敬して凡を敬を西のと
同十九日百夜無打

青丹よし奈良の都は咲花の
薫ふが如今盛なりけり

附句

ちはやふる神代も聞まつるかな　蓼太

捨て行て清水流れて　蓼太

宗ねてそ者めもまつり向ふ風　雅堂
井筆は武士く銭れて何とやら　萬古
一の句わきらうた附をさためて見るやさ秋の
くろさて捨子乃幕はやなくさ何られ
町更るまのさ海も見るら新く中ろ之を
二を捨る手人乃かさるも若ぬひと入ま
師走のこの風もつくらめされとこの句れ
お筆さとの趣れ見の趣て説しう
刀さしはうらうして人押とまて教まれの

さ海をかくんよくおる句は花かなすると
申されし
同廿日弄仙東林條所探題
気まてと羽案れ傾布き渡
女房乃踪仕冬しうて咳ふ
附句
あさ波千ののもれさ白帆千入　萬古
細町乃垣君天平しさ荒塀り　兀子
此二句のすいつきうと人く申れるに師云

かの為家を身の代とやいつおもひ侍き
世をすてしも見むと思ひ帰とて　女房の陸奥
又こゝ都をこそ二たゝび帰りてのまま
ゆかしきかの東の方へ一ちとせ
遠ちかこそあれつきせぬ名残さへ
あるしらんさしてその場乃ゆくらひて
幸逢の長伝をもとゝ侍るを堂うち
とゝ侍る又

組町の場乃見なをし侍り

楽の変化おもしろく　馬老
此句も口句の変化をいとんの変といふ字
をてお句ゆゑかゝる地形場を此風体の歌
あるべし俳名かゝ侍ると師の十さら
探題
ふるさとの一日をてあふ事　周外
月ありしかの柳を家ゝ　大耳
此一枝星をて得てや郷乃石　萬古
物ゆらの朝夕に持て羽織外　雅堂

静岡乃新さん　馬を乗性られ　馬老
風吉さんと情つる恋角外　兎夕
物凡をすらつて所さ海苔ふる　蛭路
香ちらしと立もあり井姫人　葛才
牧野やめりと狩乃立時分　蓼旦
青梅すれ花笠人祝井さり　瓦子
夕彩やさ新と家内の白乃人　蓼太
同廿一日　阿部川特本哲の表一見至中笑与墨之
同廿二日　月次奥山同井評

巻中秀逸

幾の命ちく吟ふ阪乃ひやう
一茶　清くあるを妙川伽やら　蒿古
同廿三日　廿三夜を集亭他あり依筆不記
同廿七日　月並奥山東都麦畫評

巻中秀逸

双方ちらしら伝伽ちらしやう
蛙屋　鶴ちあ新雪乃陣　空摩
同廿八日　四十四奥山

月うつ三度乃町の法例日
仲ゑ乃墨うとつ者て素後猛

附句

あちこちむくゝ時哭けり　の夫　蝦治
かくまふとうそ仮縁てふし　馬老
彩えく婦乃ゆうす　郎尚　兎夕
馬とよ他うて情事　菖才
四白いつまを一他をゆうえ哭移れ夫のちう
むく附者のかする者もいりた唐変弟の眼

りこのこむ仏教とうとう二の白ハ人目せく
あんなあをそふ毒をせうもの変ゆうふ紀
之の御ふ主一新えてゆうとと　共　主六
えうちのを陸をよく扱ひ家あせる科をも
今えをゆうをハ古ちる弱き女の情をて撥
既ひをしう沖のまて足ふ地ふうゝ何也
お白一の法例ゆうを素後の用あれを三ゐの
えれを いをうえを哭乃たを毛女をう
ひゝ白後を他う仮変ふうちを用を白

中さ御て馬乃一字ゑ　よく変化をしたと
以附ゑ様うく案

日巻中

たゑうく　堪天定をとてと
宮内御　運乃矣止千万
之風うう　ゑ良能こ去篇　夢且
御ゑ御　弼むうく　面新の二馬動し
かうきを天垂て附ゑて　なゐ化とゐし
よ様うて　仲恭雲ゑるゑ　いたふゑ

きう御宮の詞と宮ゑゐ　みゑ良能ゑ
まさまれも　ゆきんとて

日奉中

はうく　と　ゑて　ハ　ゑ　こ　日の西
只日の　ゑ　ゑ　ゑ　怖い社　生
所　ゐ

む　弥　竜乃　とと　験　萬古
移　小　ゑ　ゑ　の　戻り　賀　夢且
て　う　ゑ　の　ゑ　乃　友　夢太

師云はくそもの定たるりかうた苔の集
をとの時第てまきしくよき歌をえ
一のうもはゝ〻かゝ歌のもの書めと附
ゝ歌を定てこの方かゝところ撰し
ゝを二を撰ひとりと云天歌の師をて
天歌てちうゝ歌しをやいえん家を
かゝるかとかゝ歌のつをくゝて歌道を
むろふゝ歌師のゝ珍ことをさゝはものの
一定なるゝ云ゝ師天を云て

云ゝかゝ歌ゝ他つゝ物して家
撰を屋ゝの教なわ

附合四道

一 特 ある句の人情を特に一特と故の附句ゝ考あるべし

一 隨 ある句の姿情をうけ次して さまゝゝなる色〻

一 放 ある句に對して風句を暖後脇四附のはゝゝ花とさまゝ

一 逆 ある句の姿情を見出して多くハ ある一の用とさまる色〻

以上

三句はゝゝ探 第六段中

富士の老のとゝ夢をて俗ゝ利次
つくゝくゝ考こふくゝ生所と
鄙ゝも螺と見をはゝ仮なれ
あるかゝ特所をを物に紀想と前句乃至
あるかゝ之ゝ彼の垣御ゝ色ゝ九ゝ場も
いふへゝ伝ゝ月に惟名の原九布瓶蝶と
月を付ゝ詠ゝ月ゝよゝ詠ゝ

る鶯のあとをもみやひして恋の
ふるふ

ち更を弧して朦々たる味雪
目ゆくと濤て白帆走る
鹿鹿弟を抱きてあまて

東方随所を迷う茅里の波濤も
恙なく随帆を祝して書はらるるの
遠弟なつうと思へる抱く鹿鹿さん
勢うりしときめ紀ることアいとよ

蝶扇を乱すと代へ玉寒数
をしハ中気うんすとゐん
幻乃灯の高うこと盆の月
寒才敢附る時長れ歌志と相之好
宿るも人同しうこれ十人例和九人無と
いつる志の歎集もかう秋月の前宮
日和子蝶の湧たうわを
烟うちも哉コ小宿ゆうろ拂
女乃つ生て毎念ふうて

薬方逆作をする人の起居也野遊の在
さまざまして女の供をしるハ年代を
経の板物する男有り後楯の
河内わおるを結を新しきる示奇也
花見の日も敵鴨を風者て
こゝろを不知ゝ意人食て居る
象眼の秘密作り方を
薬方物作ハ主人と次の者と物
つゝしのよ河内ゆ人くり(ぬ世ゝ子名人

乳飲の男子(
あちらからつよ老る古狸
紙物をかゝ次神の垣見
こゝし蓮ハ笠しさゝるもなれ
薬方故作をする絵物子神の垣
見を笠ひ有戸作と一場し
ゆれて世世の子匂ひいと深し
付こゝろハ並木町まてをられて
をゝもまれと彼男子

一挺子の毎の人をもて行ふ事
素丈庵附ハ人をもて万能と云一心と
いつるを男のさ庵する人〳〵
夕アヲ見て化粧も元て用紙
完〳〵吹く笑蕾一輪
学問子唐の船まて休り
素方庵附ま時宜の人情を宗の笑蕾を
侍の姿と見てまるよわ学文と思ひあり
さハ学問の俗情と見る人〳〵

俳諧ハ俳諧ハ俳諧の
あさ行船の綱ま引さ
殺人の刑法を母のゆり起
あ事丈庵附時宜の主人公絵ま
ものさし〳〵く成ゆうちみ〳〵人間
己の墓乳見るまゝ地す
和歌らし宗十 五 形のの変
字引ら義の心を義
掛乞ハ負をませて焼〳〵り

宝月道所は迎なり辻子弥子弟子
のよくて酒は本子白を知そしと色を
盃姜の目送を説くる人のあとひ所
なるまし鄉鬼骨の隆子越よ
砌色の腦子なるもなるもし
乙子毛双くに坂おろ
ひ毛虎子又瓜も侯の一歌
ても寓のきぬ隆よい何
寿方道所は貧し任吹といふ

何某法師の天告山三十年ハ切つくる
肉統の姿由又尺おくり
貧乏くも名く陸仕の高廻り
隆る明道と原の吹ちる
赤地て孤る仏世間さ墨衣
赤対鹿所のそを人の迎と出弥と慶空
い毒て隆る大仏師伝うしとあて
弥大路のさはまて二句の習と明と
辛子う利と松盃まを彩く

[illegible]しう 林も月こそ[illegible]

一樹の陰に宗匠たつる

寒方庵附まさをの[illegible]富士流といふ

宗匠のまれくなるを弱るといふ句

ひくせまり

[illegible]萩の庵[illegible]

きりくす連[illegible]れの秋より

老を[illegible]免と出て悲孔

東方庵附[illegible]人の迎と老ハ一[illegible]て

牛も連奇をもまさに[illegible]の俤

今[illegible]解る 舟乃粧

我[illegible]白象て[illegible]

歌の中に一番 [illegible]

[illegible]人の[illegible]白紙の[illegible]

[illegible]免て顔乃一字[illegible]の費[illegible]

この唐糸とう[illegible]女[illegible]

[illegible]て[illegible]

女院を 髪 [illegible] 捨て小時[illegible]

入れ子けり月の殘まるく
春寸遊所ハ人間なる前白き女院の大
原をうつせぬ手枕の貸まるを
八れの二字ここかすしるし俳諧の骨髓
師走しぬ時ハ山ちるわるを
手やたて佛いぬ掛もさ一歌
試業の書り巣へ打く
業寸特附ものを埼を人也市女
張人反の宿れも尺ふ彩ふ

紅毛の鳥ハ前屋も垂てり
ちへ切炬の暗い長持
山乃中ぬるう血のかすり
東方遊所ハ手紙の乾燥おるとものを
ちりかなる代と尺て血の某れ寄鑿
儀氣の丈婦なるし
南蛮器物の物ハ聖ふ
とりものと雇ふ女の掛り人
玉簾天窓の憐てもふん

案方随附ハん理こ老のまけあるを女まで
いさゝひをそなる相伝家も何ん
いろ〳〵味て味の変化〳〵
そまらゝ〳〵れさいとを吐男
薬子の墨れ書る付ける
あ案方随附ハを人こおゆる何処乃
男とそめ〳〵る所あれ〳〵乳もむらハ
神ふりる老女房のさきはまるも
尺〳〵ゝ〳〵ゝ

草路房新牛

ちむさゝ紙ぬて房を敷〳〵
病人さ老ゝ付てめてさが
修城ものゝ毎乃ふゝん
薬方特附をを人の乳時〳〵猫鼠の
人下をろふる新古乃の変化ふ
いゝなるものを姫となるめまゝ
かゝ〳〵

村雨のはらゝ胡ゝ多日新
いりまして　柿の花や咲らん
　　以上　花ゝけと訂ゝ翁のまつき

栗方特附八幡宮の歌点きりかゝ乃
茂柿会の歌会より つまゝ ゝ大竹原の
叶ゝも　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
かゝりゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
あやゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

京ゝする貸傘もるをつゝ
よゝいゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
栗方逆附八郎信也貸傘もるをつゝ
とゝさゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
ゝゝるゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
あゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
日ゝを　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
かゝりゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ
　　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ　ゝ

さやいを法子茶屋の一脈
にすゝ〳〵家〳〵年賀の祝儀して
東方駿府をさす城のさま人也人待茶屋の
一劇をさまして世話役なるも何〳〵後
報をこめて出るを所と入りたる
伺の集候の殿乃おぼゆるをもひ中
出入所人のさまもるへ
おそ後しを波のさしに報をは
ゑるを帰を風ゆ

う扶子能見ぬより起て
東方駿府を伺のさま人まり句を候ぬ
とゝ後子一何る人此附句を那て云
おそろ〳〵き波より多結見度まて
いたて波上のさまるれ波と師を於の
報を〳〵はるを〳〵波ハ地名宝〳〵より結見度
附へくや雑問の宝牙ロ
移者此見を俳合ぬ徒つむま
七月の風〳〵作る掛るの

実梅の咲りも左京太夫
事方放附そ左清の時宮人八宣佐ゝの
咲り川田部の孝院法千ゝ申ゝさ
他手濃ゝ入ゝ侍
彫ゝ梅ゝ手ゝ来ゝ多ゝ紀
源氏絵の瓦てゆゝき金屏風
相ゝ見ますてと無ゝ所仲人
事可然附ゝ宮人ゝ此仲人ゝ上下
たゝめ付ゝ宮ゝ入ゝて源氏絵ゝ

御ひゝりまゝ新意の宮達ゝ手
相ゝ入ゝれ新ゝ入ゝ女ゝいゝと美ゝ女ゝつき
宮人ゝ屏風引回ゝて宮ゝ如ゝ宮ゝ
さ内ゝ入ゝ
ゝ和めゝ宮ゝ花雀ゝ味
左衛ゝ入ゝて拍ゝ子ゝ入ゝ
御焼て拍ゝ仮ゝ切ゝ
事戸徒附ゝ宮ゝ人ゝ逸ゝ代焼ゝ
庫裡ゝ桐ゝ宮ゝ人ゝ若ゝ人ゝ拍ゝ者

まり屋〜不小袴〜て鼻のあふ
うかゝふ時如何ヵ是蒙中の仮宿子
共帆も汗帆も汗風も
世の中ハ鳴て接木花曲りがら
嘸てもまれて節の苦き舟
葉方随附き人の拍子弧て接木の
曲りがゝハ世の後なゝ孤より養ふ
節嘸の拍子ふけて一生の志りと
弱嘸れて茶漬ハ別る

世繁り秋波常の五行袋
ゆうわの才芸姉ゝ
葉方随附き人と秋波常のうする
ちてまさ世ハ色まゝ女性城の
果てハ何てそ蒙の立伸まゝ法
なる〜〜さハ書あとも宮〜沢囲蒙
うゝ法ひとひとゝてうゝ
なゝうゝ蒙う舟の船沒
たてゝ立てハ亜あ乱て義相

玉のやうなる兒乃將石
春方朝臣の子の玉しく極樂
いつすり兒の刺髮と一緒にうり
ち移さかく移さてしもうえ玉乃
我足髮さきてはもるらん
異生ふるひて歩る白絲
宮殿乃後も我殿の片異
はくしく結ぶ位牌一本
春方朝臣の子の玉さして白素

懷四るり苔の白さのさ実殿うかゝ殿と
見さつきの名さ世さる立所乃
なるを三月の紙ハ片おもいる
何をもるさ紙円板のまさおそれる堀の
内子と一緒してあそれ源
春方朝臣
風光る宮も高話も極さう
文字さ積てもよめ年号

此中へ男我ひとりほうりて
棄丈随附きて人の心賢くすべき年
号といへるより一五歳の女子の行ふ
見る地の附すして男の一字弦へ附の
保証を弱めて和んに及ぶ　さ処に
他婦きたく此地をつゝめてかなへ
奇を求へ弦と師の中さ
嘲を頂はもとを加る事
弦へ　ハ贅女ら又女婆かち

桔梗を去せて母を去
棄丈婦附きて人と婆のかゝ襟
さらへなるませめて今拙のも
為せる初ちろふりさりてろ
すもち保つ全貞情附渥り
ほいたなしれ物かを人
書くアを物の多い後ろ
元義へ出ても女ちりを
棄丈婦附きて物を人全後ろ

より古き隅川芳沢るといふる歌舞岐
役者の最古なる男女人々さら
を振ひといつるなる〳〵
強横のかつら先達者
去りて永もあ人々
奪れる物乃人々むしさ紀
業可逆附き時代の写し前句千夜
恨今後の舞集さんと奪ひ度と
人々しるる物の二字より佳人の走り

除かるる物ひも人々〳〵
目あてて古き都一本
義者の名此方人〳〵
数殊さんまんき者の尤き
業可逆附人の逆すきのふ紫
者人の変と作り祐張の変りも
百万年一時代を横の業枯の中
二代の大変と古き者のなるの取
大やしるる海もかんう〳〵

競ふる近よる所のさめき
何ともそ所りのそをもる左とも
常乃の風を通て吹ふく
妻子迷所をそ人也華乳の度毛三毒の
後を法華の志ふを深れ一唱を勤て
果を宗旨論乃ふる例なも忘ひやふる
松を日和を和を歌を詠ふ
八幡宮一日を賀の三不
幡ひるる事を祈ふと

妻子迷所をそ人のこをしと加ふる
人を必高毒妻子食の事を祈て
も祈あふし小八幡志ふを似ふ
詩文横ふふて賀卑のそ志ふふ
詩もかんさく馬名根の入湯の案情と
又ふ

高の松ひを神をその外
炬をめる者の芳と風の月
問ふふを乃あふへる

薬草遠近をはかりて四季の草の花を
うゑ採の業をなす山ちかき月の名所
なるを宿とす花はなほ化仏の乗ずるとも
一時にして散ぬるが如し出て去ること
かくのごとし

森羅万象皆空無常なり

祇園精舎の鐘の音諸行無常
唱ふるも一向くの義なり川
薬草樹林の根本枝葉花実ともに
三法の妙理ふかくかくれなき乃
ち枕草子に世のすさまじきもの
修験のあそびの原うるさしと
寺まゐりする方違ふ所の淀芝居
強文まゐりする物忌と石山
詣出しの匂ひ香る二月祭
薬草遠近はかりて人参りぬべと石山と
いへる詞よりきのふの祭りと附出し
られて彩神へまゐり太平の事の

いつくしの條情もかうん

紙墨と共に八月三日出

るとけと以ふ白なの名

山風手紙と羅も次あり

東方物所なる人の迎えかの白猫を

阿弗一のまゝ男も羅紙すて出る

ゆくえ也

よくこゝの和わらず

毒所手風ふるゝと病ち

毎乃第千夜所ちこち

東方物所なる人の迎えかの白猫を

阿弗一の床揚る四枝ひて釈伽の法師

一のねなゝ掃ちゝ水ゝ毒ひよ

ゝよも旅ふゝ所ちれ屋

鼠上ゝ服のかゝんを焼お直

いつゝ内徒ゝ女あゝ所ゝ

東方陸所なる人の迎えかの白猫乃

ゝゝんよ四を所ゝ情みま本の碧乃

金と見なして除き除く

まさに掛人の旅行きを

なのの掛れ事分切と行不

自然のいそるを梅の立寄

栗の逢附きを場のを人と行不と

弥めたるより梅金庵の改弓とおの

かりうる立寄の設の寄まり

幕湯を伽羅の減ぬ見物

先紙布出して庵掛の汗拭

ひろまを伝を我いのちより

栗方物附を人の部情と紙布流して

先吐長手汗刷ぬひらハ物見の程

かりきめ入るを桔の庵掛を

天我を絨の鼻紙袋ひらあり

嫌うちの新寄手也新

菰代の楽屋を湯う垣見

栗方物附きを場の迫し行寄ゆと

いるるを汗ち旅寄庵也

見事する必恵の阿しらひともに妙也
左もあし是色ゐの心るせ女
燈ニ於て移乎乃しも下部
ゑあと此ふ唱に茶子拾ちく
蕉翁放附ぬ槐なり人の付かひこと
うらくとかゝる蝶き必和月北始
素らへしらき余合の中北風情に
しるあ上にもの哉活ろさ海も
いえんうさなし

對句ニ後る趣は切の撥
ゑ阿へ作料の手向北枯尾花
津波の終乃き紀月影
蕉翁随附ぬ立場の響をむりしハ志ら
壁の鮮を料も海士の家とれくて
芸は綴りてかの春葉歌の傳ふれんり
目ニ立るもの八日を妙なる記
言下を離れて風化の趣を
無病我人せしくと悲ふ為

東方遊行をする人の意情を彼志かるされ
光陰をよくよく思ふらんと御ゐまとひの
ひとりなるをさまされた侍の又せしくと
ひとりを拙僧ひとり婆情附あふさて
ひとりをしの御一される和尚のをあて如む
まーを而をまり
敷はらくもこの川の秋さを
けをろハたるぬ月蕉吟
為ひ山ゐりの法命てハあん

東方遊行をする人うり蕉吟のやうく
くまり月ハ新面人とみうをたるより
法命ひりのの面つうり又ちもちす
消をあ先千貧の埋りく
思ふわと上て芭月の弘行れ
おうを遊ひの蕉をこうり
東方遊行をする人の意情くけ姑拙
うくを年もやゝ世るてるうう結ヨ小所う
光を光(老)を身ぬうを人ヨ赤蕉ひるさ海如一し